

実践校に関する事項		
学校区分	学校名	学校長名
小学校	和歌山大学教育学部附属小学校	今村律子
学校所在地		
〒640-8137 和歌山市吹上1-4-1 tel 073 (422) 6105 fax 073 (436) 6470		
担当者名	担当教科	
梶本久子	社会科	
<p>〔学校の概要〕</p> <p>和歌山市の中心部に位置しており、南は和歌浦の風光を眺め、西は紀淡海峡を経て遠く淡路島を望み、北は虎伏城（和歌山城）を仰ぎみ紀の川の流れを越えてはるか紀泉の連山に対する風光絶佳の土地である。周りには公共施設も多くあり、教育環境に恵まれている。また、校内にも四季折々の木々や草花があり、自然環境にも恵まれている。慶応2年これが学習館とよばれ、文武合併の教授所となり、「藩士一般年令50才未満ノ者ハ必ス就学セサルヘカラサル者」とし、国学・漢学・蘭学・兵学・洋算・剣術・槍術・体術の教場がおかれ、紀州の藩立学校として栄えた。学級数は21，全校児童数は572名である。</p> <p>また、「Enrichment—豊かな情操— intelligence—質の高い知性— creativity—輝く創造性—」を教育目標とし、「問い続け、学び続ける子どもたち」を研究テーマを掲げて研究を進め、子どもたちの質の高い学びをめざしている。</p>		
研究実践に関する事項		
対象者児童・生徒	学習支援者等（延人数）	主な活動場所
学年 6年生 29名	31名 職員 2名	高野山
実践研究テーマ		
問い続け、学び続ける子どもたち		
実践教科等名	単元名	
社会科	わたしたちの願いと政治のはたらき～現在の陸奥宗光になろう！～	
〔キーワード〕 和歌山県 インバウンド観光 政治		
<p>〔単元目標〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人一人が主権者としての自覚を持ち、よりよい社会の形成や和歌山県の未来を考え、学んだことをいかそうとする。（社会とかかわる力） インバウンド観光の政策や政治の働きについて、他者との対話的・協働的な学び合いを通して自らの考えをもち、判断を行うことができる。（公正な判断力） 地方公共団体の働きや議会・行政・国の支援・住民の関係や政治の役割，政策決定のプロセスについて，調査したり資料を活用したりして調べ，和歌山のインバウンド観光の政策を通して，政治の働きを理解する。（社会認識） 		
<p>〔学習に当たった全学習時間数（世界遺産学習に関わる時間数及び 学習活動名／教材名）〕</p> <p>全体 17 時間 （「高野山・世界遺産とインバウンド観光」 2時間 ）</p>		
〔地域および文化財管理者等との連携の実施状況〕		

実践校に関する事項			
〔单元指導計画概要〕			
	主な学習活動	学習への支援	評価方法等
1	だれもが住みよいまちをめざして ・「長期総合計画」「観光振興アクションプラン」「議会の働き」について調べる (4時間)	GTとして来校してもらい、和歌山県の観光の課題、めざす将来像、県の取り組みを聞きながら、具体的な例をもとに調べる。 観光アクションプランを作成する際、どういうことに留意しているかを観点に聞き取りをする。	地方公共団体の政治のしくみと願いが実現するまでの流れについて情報を集めている【ノート】 県庁のはたらきや政策など理解することができる。
2	ぼくたちの「観光まちづくり」を考えよう (3時間) ・和歌山県の観光の施策を調べる ・学習課題についてひとり学習をする。	分かったことを図やグラフを活用させながら分かりやすくまとめる。観光立県にするために取り組んでいることについて資料をもとに調べ、自分たちの願いを実現するためには政治の働きと共に自治が大切であることも表現できるようにする。	県のかかえる観光の問題点やその解決策を考えることができる(観察・発言)(イー②)和歌山県の観光の課題や将来についてについて資料を用いて調べまとめることができる。
3	インバウンド観光から、世界遺産を考えよう。(6時間) ・高野山に行って実際にインタビューする ・世界遺産センターや県庁の人に話を聞く	学習対象や課題の発見、出会いを大切に、対象のこだわりや働きかけができるような場を保障する	グループ内で協力し合い調査計画や役割分担等について話し合おうとしている。取材先の仕事内容等について質問したことを具体的に捉えようとしている。(取材メモ・ノート)
4	6 A 議会を開こう！(2時館) ・インバウンド観光について考える	調べ学習が進んでいない子には、インタビュー・アンケート・インターネットなど、ひとり学習についてアドバイスする。 振り返りカードや取材ノートを活用させる	調べたことや自分の思いを比較したり関連づけたりしながら表現することができる。(観察・発言)◎自分たちの住む町に対してよりよいまちづくりのため提言を考えることができる。(観察・発言)
5	「観光振興 6 A アクションプラン」を作ろう (2時間) ・アクションプランを県や地域の人に提案して、社会参画を意識した発信を行う。	前時の課題を解決するためにどのように政治が解決していけばいいかを考えさせまとめる	自分たちの住む町に対してよりよいまちづくりのため提言を考えることができる インタビューやゲストティーチャーなど関わった人の思いや願いから、自分の見方や考えを再構成することができる。 (ノート・発言)
<p>〔单元学習の成果と課題〕 社会参画をめざした問題解決学習の授業を実現することによって、クラス全体に多面的・発展的思考力が育っていく姿が検証できた。地域教材は地域の問題であると同時に、他の地域や国にもつながる社会問題としての側面がある。地域教材である和歌山県の課題ということで、興味・関心の高い社会的事象と関連した問題を設定し、社会事象を自分のものとしてとらえさせた。またそのことにより、子どもたちの多角的・発展的な思考の深化につながった。一方で、さらに発展的思考・多角的思考を深めるためには、できるだけ多くの意見に触れさせ、思考を揺さぶらせることや多くの具体的事実で獲得した知識を通して、仲間や他者に共有してもらえる価値判断をする場面が必要である。そして多くの知識を獲得し、その知識を比較したり、関連づけたりしながら多角的に考察することが、複数の価値を得ることになり、その価値の中から、自分で納得できる価値を選択し、判断をすることができるようになったとき、発展的な思考が深まったといえる。そのためにも、子どもの思考をつなげていくような丁寧な授業デザインが必要である。</p>			
<p>〔世界遺産学習の効果〕 地域社会の課題を解決するためには、学問的な知識・技能(社会認識)が必要不可欠である。様々な知識を習得した子どもは、実際の生活で活用する。また、その過程で、高野山の観光客との交流を重視した。未来の主権者として、住んでいる地域社会の一員であるという認識をもつことで、子ども目線での「まちづくり」に参加することができた。子どもたちは政策を考え、観光の大切さに気づいた。また、予算の編成から日本の財政についてつなげて考えるようになった。政策の作成方法一つをとっても、知識・技能として、子どもが習得してきた事柄である。社会に働きかけるためことで子どもたちは達成感をもち自己実現を感じた。このような授業を繰り返し行うことが社会参画を志向する公民的資質につながるであろう。</p>			
<p>〔世界遺産学習の今後の方向性及び改善点について〕 改善点は特にありません。こちらの単元のデザインを重視し、臨機応変に対応していただきました。</p>			

様式 2

平成 29 年度 「次世代育成事業」における学習記録

[概要報告書 学習記録・活動写真]

授業記録より

さとる（名前は全て仮名）から出た問題「和歌山市（和歌浦）を 6 A のインバウンド観光のイチオシにしたいんだけど、みんなどう思う？」について話し合った。課題に関しては、観光地のよさや政策を調べることにより、多種多様な立場の人の思いや行政で働く人の願いに気づくこともできるのではないかと考えた。和歌山県の予算の中で観光が占める割合は少額である。予算について考え始めている子も

いるため、今後の県の予算や税金の働きなどの学習につながっていった。子どもたちからは世界遺産の高野山が、県のターゲットの欧米人対応になっていることや、和歌山の売りである自然の観点からジオパークやラムサール条約に認定されている串本についてなど、話し合いが続けられた。子どもが焦点化していく場面と教師の資料提示によって焦点化していき深い学びになった場面をあげたい。

ゆうた：そこの日本地図にも書いてるけど、和歌山の中で新しい GR を作ったらいいと思ってる。岩永さんからもらった資料「外国人観光客が和歌山市と一緒にどこを訪れたか」聞いたら、大阪にいった 34% なんだけど、高野山 1.4%、箱根・富士山も 1.4% なんよ。（C： えー?? やばいやん。そんなんあかんやん）

今の状況みたらたけるの考えもいいけど、このままやったら、県内やのにつながりが弱いことがわかる。紀南では世界遺産の聖地巡礼バスが人気っていった。（地図をさしながら）、点々としたものを線で結んで、ストーリーバスつくったら県内の周遊にもなる。一個一個の観光地を育てるのもいいけど、つなげることが大切なんよな。

しんじ：ゆうたに続けて、点を線でつないでいくのは賛成なんよ。ここ、和歌山市、和歌浦。ここが高野山、串本、白浜はこら辺。これら全部つなげるといい（日本地図を指し）ここに昇竜道ってある。ぼくもつなぐということで調べていたら、見つけたんやけど、愛知から北陸全部能登半島とかを道路や車、新幹線でつないでいる。和歌山って新幹線とか地下鉄ってない。和歌山がモデルになって、和歌山 GR みたいにこうやってつなげたら外国人も行きやすいし移動もしやすいから和歌山市からどこかへいく行くのも行きやすくなる。だからさとるの和歌浦も含めて和歌山のいいところつなげるのがいいと思う。

T 和歌山は GR がなくて観光客少ないって言ってたよね？和歌山は、この資料で 2016 年の外国人の宿泊者数 19 位なんです。でも、岐阜は空港も港もないし GR から離れてるのに 14 位なんよ。

C え？なんで岐阜が・・・（口々に）C 絶対なんかしてる

T そう！その通り、なんかしてるんよ。考えノートに書いて下さい。

その後、子どもたちからは、地図帳や既習事項をもとに、考えを深めていった。地理的な要因について話し合った後、他県とはひと味違ったインバウンド戦略「岐阜モデル」の成功の秘訣の資料の話になる。

たくみ：岐阜が他県と違うインバウンドでは、1 番の知事が自ら現地に行って宣伝っていうのは仁坂知事やってるやろ？5 番の県・民間・学校・産業の全ての関係者が力を合わせてつながるができていないから一番大切やと思う。いろんな関係の人と力を合わせることで、つまり線と線がつながる。

ちあき：和歌山の人は何もないっていうけど岐阜にはそんな人いないと思う。理由は 5 番の全員が力を合わせて協力してるからそうなんだと思った。和歌山もすればいいと思う。

えいこ：私も 5 番が大切と思った。和歌山の人一人一人が来てほしいって思ったら外国人もきてくれる。岐阜も最初は観光客が少なかったから岐阜モデルつくった。そんなふうに協力が大切という県民の意識が大切。和歌山の課題の人口減少を救うには、外国人が 11 人来たら人口が一人減ってもまかなえるからやいと思う。

ゆうき：続けて、3（県の中の市町村を周遊する体験ツアー）も 4（岐阜の宝ものプロジェクト）も和歌山ではやっている。やっぱり、6 の中部北陸 9 県をつなげる新ゴールデンルートのことが大事やと思う。地図帳見たら新 GR って、北陸につながる岐阜の近くに静岡、山梨、愛知あるやん？富士山近いし世界遺産やん？周りの県と協力してできる GR を和歌山でもしたらいいと思う。

ゆうた：日本地図に岐阜までの 14 位までを印つけてみた。すごく地域によって偏りある。こら辺で、昇竜道があるところ。こらへんはみんな上位にはいってる。近畿地方は大阪・京都・兵庫が 14 位までにはいってる。奈良・和歌山も一緒になって、他府県との協力すればいいと思う。

しんじ：和歌山ができてないことは和歌山何もないよって意識を変えることと GR とかでつなぐだけ。昔に比べて宣伝上手やし観光客も増えてきてる。和歌山は和歌山だけで頑張ってるんよ。岐阜やったら他の県と連携して順位が上がったんよ。和歌山もこれぐらいの GR を作ってあげたい。

さとる：そうか！わかった。と言いながら何度も頷く

T：え？みんな前はつながない方がいい。和歌山だけでお金入ったらいいって言ってやん？

ちゆき：それやったら限界あるんよ。和歌山ってU S J 近い。G R から関西一帯をつなぐと日本全体の観光客も増えるやん？ 少子高齢化もまかなえるかもしれへんやん？

たける：京都と和歌山やったらどっちの方が交通便利やと思う？ 金閣・銀閣あるやん？ でも、こっちだって、高野山あるやん？ 歴史のストーリーやったら勝ってると思う。今、G R 入ってないやん？ 例えば、茨城は東京の近くやのに31位（タブレット見せる）全然つながってない。交通の便はあまりよくないから泊まってくれない。交通の便が悪かったらいくらきれいにしても来てくれない。やっぱり、高速道路や電車がつながるようにしてシルバールート作ったらいいと思う。

このあと、単元のゴールである6 A 観光アクションプログラムにつながる話や連携の大切さについて話す子も多くいた。その中で、交通を何とかしなければならないというたけるの意見をうけて予算の話になった。子どもたちの予算についての認識を深めるため、次時に和歌山県の歳入と歳出の話をすることを告げ、話し合いが終わった。

調べた事実を整理して自分の考えの根拠をもたせたり、友達の説明の中で、考えの根拠となっている事実は何かを聞き取らせたりしながら、本時の中でその思いがクラス全体に伝わった。

そのために、各自が自分の考えや願いの根拠を持ち、今までの学習を振り返りながら授業に臨むことで、和歌山県についていろんな角度から考え、意見交換し、多くの方から得た断片的な知識を概念的・統括的な知識に高めるための練り合い、高め合いの場になった。そして、住民の和歌山県に対する期待や、地方公共団体の仕組みや役割について気づき、自分の目線で「望ましい和歌山県の姿」を考えると共に、自分は県民の一人であると共に、まちづくりの主役であるという認識を持ち、進んで地域にアプローチできる社会人として成長していくためのきっかけになったのではないだろうか。今後も地域へ発信することにより、和歌山の将来を大切に考え、自ら行動する態度が育っていくことを願っている。

実社会・実生活に開かれた問題解決学習中でプロジェクト型の学習を積極的に取り入れ、学習過程を大事にして授業モデルをデザインした。

社会参画とは地域と「双方向に交流することや地域むけ発信することだけではなく、教室に閉じない学びが大切なのである。「提案」「発信」することを意識した学習過程では常に習得・活用・探究を往還しながら子どもたちは学びを深めていく。学習の過程で子どもたちの考えが収束、拡散を繰り返し、それぞれの学習過程を往還しながら社会認識を太らせていくことにより、よりよい社会に参画していく子どもが育ち、あらたな問題解決学習が成立すると考えている。

今回、1学期の歴史と公民をつなげ、1年間をつなげて構想した。常に「和歌山」「高野山」と関連させながら進めていった。しかし、地域教材すべてが身近というのではなく、身近であるから理解しやすいというわけではない。また、社会と関わるのが第一となり、社会科としての子どもの学びが不十分になりはしないだろうかと感じている。子どもたちが関わり合い、ともに学びを高めていくことは小さな社会である。話し合いで合意形成していく場合は、将来社会の一員として行われる議論の場と同じものであることから、さらに教材研究を丁寧に行い、教科内容に即したものを教材化していくことも必要である。

今回、グループ学習を単元の中に多く取り入れたことで、子どもたちは同じグループの仲間や他グループの仲間との関わり合いの中で学びを深めていった。また、全体学習でも同じテーマの下に話し合い、合意形成していく場を多く設けていくことで、子どもたちは共に学びあう関係性を築くことができた。それは、社会科が嫌いや好きという問題でなく、学級の問題として真剣に考える姿へと変容していった。さらに各分野の調べ学習から、和歌山県や世界遺産に関わる共通の問題へ子どもたちの意識が広がり、これから社会の一員としてどうあるべきか考え始めた。それまでは、ニュースや教科書を第三者的にみていた子どもたちが、和歌山に住む一人の住民としてどうあるべきなのかを考える必要が生まれ、観光地の課題を子どもたちなりにつなげていく思考を始め、クラス全体に広がっていき、全体の意識の向上になった。

それらの積み重ねが「6 A 観光アクションプラン」の学習での提案書の作成、それを基にした話し合い活動にいかすことができたと考える。聞き合える関係性の構築は大切なことである。今後も、協働で学びを深めていくことのできる授業モデルの修正を考えていき、子どもたちの社会参画する力を育む問題解決学習の展開について考えていきたい。